

第4回アジア養豚獣医学会に期待する

柏崎 守 (日本豚病研究会)

Kashiwazaki, M. (2009). We expect The 4th Asia Pig Veterinary Society (APVS) congress to succeed.
Proc. Jpn. Pig Vet. Soc. 55, 1-3.

キーワード：アジア養豚獣医学会、アジア養豚、生産
獣医療

アジア養豚獣医学会 (APVS) はアジア養豚の発展を目指して、2002年、豚の生産管理や衛生対策などに関する研究発表や情報交換を行うために設立された。第4回 APVS 集会 (APVS 2009 in つくば) が今秋10月26~28日の3日間、茨城県つくば市で開催される。ここでは、APVS 設立の経緯とその意義、第4回集会への期待などを述べてみたい。

学会設立のきっかけ

APVS の設立は、韓国の Jeong Hyun-Kyu (鄭賢圭) 獣医師と日本の豊浦雅次獣医師の二人に負うところ大きい。ジョン獣医師は、1991年設立の韓国最大の養豚組合「ドッドラム (Dodram)」に所属し、その運営のかたわら組合加入の農場に対する獣医療とコンサルティング、人材育成などに携わっておられる。豊浦獣医師は1982年に豚専門の診療所を開設し、豚生産者との契約による定期農場訪問による生産獣医療を中心とする農場支援の全国展開を図った先駆者であり、この業績に対して1996年、日本豚病研究会から「第3回藤崎優次郎賞」が贈られた。

ジョン獣医師が2001年秋に来日した折、以前から親交のある豊浦獣医師と会い、アジア養豚の衛生事情を巡って熱い議論を交わした。その背景には、その前年 (2000年) に韓国やわが国で牛の口蹄疫発生があり、両国間では人的、物的交流が多く伝播リスクが高いとの警戒感があったのだろう。二人の考えは、アジア養豚の発展は衛生問題の解決と生産管理の改善なくしてあり得ないとの認識で一致し、その結論としてアジアで養豚にかかわっている獣医師、技術者、研究者、さらには生産者も含めた集会を定期的で開催するということがあった。しかし、その準備に取り掛かろうとした矢先、豊浦獣医師は53歳の若さで急逝された。

案件を持ち帰ったジョン獣医師は、韓国養豚獣医師会 (構成会員約150人) の同意を得て、各国関係者の理

解を得るため、関係国へ足を運んでカウンターパートとの折衝を続けた。そして2002年春、韓国のジョン氏をはじめ、日本からは故豊浦氏の遺志を受け継いだ大井宗孝獣医師のほか、タイ、マレーシア、中国およびフィリピンから約15名の獣医師がソウルに集まり、アジア養豚の持続的発展という目標を共有して APVS が誕生するに至った。また、APVS 理事メンバーに日本から石川弘道獣医師 (日本養豚開業獣医師協会) が選出された。

アジアの養豚と衛生事情

アジアの養豚は、種々の問題を抱えながらも着実に拡大している。とりわけ中国は全世界の飼養頭数の約半分を占める養豚超大国となり、第3回 APVS (2007、武漢) での報告によると、国全体の飼育数は約4.9億頭にのぼり、過去5年間の増加率は年平均14%であった。しかし、外来種の三元交配種を使った大規模養豚場が急速に増加しているものの、零細な副業的経営が大半を占める養豚構造であり、生産効率は全体として高いとはいえないようである。

アセアン諸国では、宗教上の理由から豚肉を消費しない人口割合が多い国でもあり、養豚の政策上の位置付けは異なるものの、種々の規制を設けながらも養豚を許容している。各国の飼養頭数をみると、ベトナムは2,700万頭で最も多く、フィリピンは1,200万頭を飼養する養豚大国であり、タイ、インドネシア、台湾なども日本や韓国と肩を並べる飼養規模である。一方、シンガポールは1990年、環境問題の悪化を理由に国内での養豚を一切禁止する養豚事業撤退政策を掲げた。

このように、アジアの養豚は農業の基幹的部門である国・地域が多いとはいえ、伝染病の防疫をはじめ、飼養管理や衛生管理の改善、優良遺伝資源の確保や育種改良、飼料資源の確保、環境保全、安全性確保など、早急に解決すべき技術的問題を抱えている現状にある。その中で、とりわけて深刻なのは衛生問題であるといえよう。

アジア地域では依然として、口蹄疫や豚コレラなど

の急性伝染病がしばしば発生して甚大な経済的被害を被っているばかりか、畜産物の国際貿易や農業政策に深刻な影響を与えている。中国の養豚は全体的に防疫対策が不十分とされ、詳細は不明だが高病原性PRRSや豚コレラが全土で発生して豚の飼養頭数および出荷頭数に深刻な影響を与えているといわれる。マレーシアの養豚は、1998年から1999年にかけて人獣共通感染症で新興のウイルス性脳炎が発生し、これを受けて環境規制が一段と強化されたほか、期限付きの集中養豚地域化 (Integrated Pig Farm Area:IPFA) 計画が実施されたほどである。

台湾はアジアで最初に生産効率の高い大規模養豚を実現し、わが国の豚肉輸入の4割を台湾産で占める時代があったが、1997年の口蹄疫発生で壊滅的打撃を被り、かつての輸出型養豚は内需型産業としての存在となってしまった。タイもブロイラーに次ぐ輸出産業として養豚振興を推進してきているが、口蹄疫や豚コレラの防疫問題が豚肉輸出のネックとなっており、たとえば日本への輸出品目はソーセージや調製品に限られている。さらに同国では2007年末から発生した豚流行性下痢 (PED) により、80万頭前後の子豚が死亡したといわれる。韓国では2000年と2002年に牛と豚の口蹄疫発生で総額4,500億ウォンの損失を被ったといわれ、口蹄疫再発の可能性や豚コレラの清浄化が大きな課題となっている。

21世紀はアジア太平洋の世紀といわれる中、アジア養豚の発展は国・地域の意気込みとは裏腹に防疫対策は不十分なままであり、とくに伝染病の防圧は避けて通れない緊急の課題である。まずは関係する国・地域が協調して防疫政策の一体的な展開を図ることがもちろん重要であるが、それと同時に農場段階においても防疫管理の強化に取り組み、いわゆる防疫チェーンの構築に協力することが重要であると考えられる。第4回 APVS は「養豚獣医師診断技術向上のために」をスローガンに掲げており、国・地域および農場段階における防疫問題の情報交換が行われることを期待している。

アジア養豚の発展を目指して

APVS の第1回集会は2003年にソウル、第2回は2005年にマニラ、第3回は2007年に武漢 (中国) で開催された。各研究集会にはアジアをはじめ、欧米から獣医師、研究者、技術者、生産者など多数の関係者が参集し、日本からも毎回30~40名が参加して研究発表

をはじめ、講演等を行ってきた。いずれの集会においても先端的な研究成果が披露される一方で、生産現場で直面している技術的課題に関する調査研究の成果が積極的に発表されている。さらに、アジアの国・地域における養豚事情や地域性の高い疾病や飼養問題などをめぐって活発な討論が交わされてきた。

APVS の設立は2003年のことで日は浅いが、アジア地域において生産性の高い養豚経営ができる環境をつくり出すために、生産現場に視点を置いた学術活動を行っているユニークな学術団体である。さらに、養豚のいろいろな分野で活躍している関係者が一堂に会するインターセクショナルの学術集会なので、幅広い情報交換が可能であり、研究ニーズの把握、技術開発の促進、生産現場への技術普及などに対して大きなインセンティブを与えるものとして国の内外から高い評価を得つつあるようだ。

この度の第4回 APVS 集会においても従来の運営方針を踏襲し、さらに生産者公開セミナーも開催することとしている。開催にあたっては企業、法人、行政機関、生産者団体など多方面からの支援の下、養豚関係研究団体の日本豚病研究会をはじめ、(中)日本養豚開業獣医師協会、日本養豚学会および日本 SPF 豚研究会が連携して実行委員会を組織して主催する。達成目標として、①アジアの国・地域等で養豚に携わっている様々な分野の人の連携強化、②アジアの国・地域等の養豚において解決すべき技術的課題の整理、③アジアの国・地域等における豚生産ベンチマーク (生産成績) の評価の3項目を掲げている。なお、第4回 APVS 集会に関する詳しい情報はホームページ (<http://apvs2009.org/>) をご覧いただきたい。

生産獣医療の産業貢献

豚肉貿易の世界でも産地間競争はますます激しくなっており、わが国における豚肉自給率は重量ベースで50%までに低下した。自給率は業界パワーを示すバロメーターともいえるが、戸数7千戸で年間1,600万頭以上の肉豚生産を行う世界有数の豚生産国であることに変わりない。だが、高密度で大量飼育する近代的な養豚は疾病被害ではむしろかつてより大きなりスクを背負うようになっており、生産現場では獣医師の日常的な関与が欠かせない状況となっている。

近年、疾病の病態は新疾病の発生に加えてますます複雑かつ多様化した。臨床経験が豊かな豚専門の獣医師でさえ、病気の診断を行い、経過を予測して最良と

思われる治療・予防措置を行っても、予想した結果になるとは限らない事例も多く、複雑で際限のない多くの臨床的問題を抱えるようになってきている。このため、生産者と緊密な連携の下で定期的な農場訪問による診断サービスの実施により、真実により近い臨床的判断やその評価が行える生産獣医療の環境を構築する地道な努力が行われている。こうした生産者参画型の生産獣医療は診断・治療・予防に有効だけでなく、生産者の衛生意識や生産技術を一段と高めるほか、農場に見合った生産目標の設定や生産管理工程の変更などに際して正しい判断がくだせるなどの利点が生まれている。

こうした地道な取り組みは生産者との信頼関係をより高めるだけでなく、“生産獣医療の産業貢献”という充足感を見いだす機会も増えてこよう。さらには養豚獣医師の不足が叫ばれる中、獣医師自らがビッグ・プライドの姿勢を世に広く示すことで生産獣医療への関心がさらに高まるものと確信している。そういった観点からも、この度の APVS の国内開催には大きな意義があり、養豚獣医師はもちろんのこと生産者を含めて一人でも多く参加してもらい、養豚産業の持続的発展へ向けての決意を再確認する機会になることを切に願う次第です。



APVS 2009 in Tsukuba

The 4th Congress of Asian Pig Veterinary Society

第4回 アジア養豚獣医学会

場所：つくば国際会議場「エポカルつくば」(茨城県つくば市)
 期間：2009年10月26日(月)～28日(水)
<http://apvs2009.org/>

【メインテーマ】
 豚の疾病診断技術向上のために

【基調講演】

1. アジア各国の養豚事情と問題豚疾病
2. 口蹄疫と豚コレラの広域清浄化を目指して
3. 養豚産業を脅かす PRRS/PCVAD の現状と診断

【ワークショップ】

- ・繁殖
- ・PRRS と PCVAD
- ・Research Topics (先進的診断技術、ワクチン、免疫、創薬等)
- ・Food Safety (サルモネラ、薬剤耐性菌等)
- ・生産システムとバイオセキュリティ
- ・腸管感染症(ウイルス性および細菌性下痢)
- ・細菌性肺炎
- ・新しい診断技術

【日本養豚学会共催 公開セミナー】
 ・自給飼料を活用した豚肉生産

第4回 アジア養豚獣医学会 (APVS2009)

大会長：柏崎 守 (元農林水産省畜産衛生試験場場長)
 開催期間：2009年10月26日～28日 (3日間)
 開催場所：つくば国際会議場「エポカルつくば」(茨城県つくば市竹園2-20-31)
 主催：日本豚病研究会 日本養豚学会
 日本 SPF 豚研究会 日本養豚獣医師協会
 後援：農林水産省ほか (予定)